

燈を不持者罷通る。何者ぞと咎候へば町家へ逃入候後より、棒を以て一二打之。小松より帳附に来る古市左近与力小塚惣右衛草履取也。惣右衛門罷出、只今各御打擲被成候者は拙者家來に候。今日檢地帳相司方へ爲持出候所、右之仕合に候。御法の筋目に可申付候如何と云。いづれも金森平三郎事に懲候て、色々言葉をさげ詫言すれども不堪忍、其事大に罷成。歴々小松・金澤の者罷出で惣右衛門に、堪忍可然と申聞といへども承引せず。年寄中承之、惣右衛門腹の入様に手を入爲申聞候へば、書附を以て詫言せば其分に可仕と申候に付、五人の者より書付遣之候。右草履取何の咎も無之候所、此方誤て致打擲候儀令迷惑候。以來如何様の儀候とも、此者御法度不相背段は申分不可致と申趣にて事濟候。微妙公御歸藩の後此儀違御聽候所、右五人小松より召に来候。各心中覺悟相究罷越候。然所右書附御出し、士と士との取合には、いか成る腰抜にてもか様の書付は不致事に候。是は我等へ對し調たる書付と思召候。一段御満足に候。何茂寒氣の刻骨折申候との御意にて、各白銀五枚賜之。罷歸り、扱もく案の外成御意とて悅合へり。

一、松雲公の武州猪狩
寛文七年十月廿五日、武州谷口村丸山にて猪獵列卒千人、内八百人は外列卒にて不動、二百人は内列卒にて丸山へ入て狩之。網四百間餘綱、百間也。網張奉行村上助右衛門・赤尾平六・關屋新兵衛也。御前御羽織地色茶、白御上帶金御幣、朝鮮笠被爲召候。御供の騎馬は奥村因幡・奥村内匠・横山志摩・多賀隼人・多賀逸角・葛卷喜一郎・奥村瀬兵衛・稻垣三郎衛・長谷川頼母・辻市右衛門・今井源五兵衛也。網奉行三人は網外所々に鎗持居之。惣奉行は前田主水・神尾數馬、列卒頭は中川彌左衛門・菊池十六郎・笹島助左衛門・玉井傳右衛門・津田勘十郎・恒川七兵衛・水野次郎右衛門也。諸手の首尾相調へ、於御前拍子木打之、聞之而内外の列卒鬨聲を擧る。内列卒丸山へ入て狩之。然所大猪二頭出て、一頭は北の方中川彌左衛門手合へ行、一頭は關屋新兵衛前へ一文字に走る。網を見て南方へ四五間走る所を、葵犬六七頭にて喰倒す。北へ走るは列卒を破んとせしが取て返し、關屋が邊の網にて行懸る。關屋鎗にて眉間を一鎗突く。猪左へねぢむき歸る所を、右の太腹より左の肩先へ突出す。猪は網より

三間許走り倒る。葵犬二頭來て食之。比良左内來てとどめを刺す。御騎上より御言葉かけられ御喜色。此時又鬨聲を擧ぐ。小猪二頭北の方中川彌左衛門前へ走る。列卒追返す。此時列卒少亂れ立を見て、一頭は逃出たり。先の猪は場中へ出るを、犬三頭して喰倒す。大猪一頭又出て關屋が方へ來て網に當る。左の首より右の股へかけて突く。猪疲れながら南へ六七間走る所を、犬六七頭にて喰倒す。然所誰人の鎗持か兩人來てひた突に突。御仲間共も數人來て竹鎗にて突之。御犬に危く候ておけくと制すれども聞も不入。如案小六と云御秘藏の犬の上口びるを誤て突く。御機嫌散々損じぬ。去共五頭出たる猪四頭迄獲らるゝに付、御快く御辨當被爲召上 下々へも被下。

廿八日御鷹野の所、鶴間村の笹根に老猪有之旨、屋木七左衛門注進す。晝頃俄に列卒網等の用意すれども事不調候内、猪遁失せぬ。谷口村より鶴間村迄一里。新戸村よりは、谷口へも鶴間へも二里也。

十一月二日木曾村八幡山にて猪獵。未明より奉行共罷越。惣列卒千五百人、内千三百人は外列卒、二百人は内列卒。作

法丸山の時の如し。猪四頭・鹿一頭出で猪皆獲らる。村上助右衛門・本保孫八・齋藤孫市等鎗にて突之、大地眞齋は刀にて切之。辻市右衛門・今井源五兵衛・長谷川頼母等も鎗にて突よし。鹿は此彼飛廻り犬も人も留不得。本の笹根へ入る。又狩出し、種々にすれども捕不得、終に外列卒をかけ出で遁行ぬ。御氣色悪し。同八日檜山へ神尾數馬・前田主水・中川彌左衛門・關屋新兵衛罷越、鹿の狩場見立候様被仰出、場所見立繪圖にて上之。

九日檜山鹿獵。列卒千六百八十人。鹿迄に付、犬は外に居て、各鎗にて網内へ入り、随分突捕候様に命ぜらる。鹿四頭出たり。内一頭取巻候へども逃出たり。一は松原の内より網を飛越え、大鹿一頭網の内を走り廻る。兩度飛損じ、赤尾平六に突かれけれども、少の儀にも事ともせず、人の少き方より網を飛越たり。一頭はわなに懸て打殺す。此日雉四、兔十一獲。夜に入御歸り。同十三日江戸御歸邸。

一、鳩巢先生の詩章

本佐記題跋淨書、禿筆を灑して進之候。紅帯なるほど恰好よろしく雅に相見え、珍重に存候。長門紙三葉、是又任盛意